

ロシア・ソビエト民族学と スラヴ民族学におけるウクライナ ——歴史的素描——

伊 東 一 郎

はじめに

2022年2月24日にロシアがウクライナに侵攻した。50年来ロシアとウクライナの双方を研究対象としてきた私にとっては衝撃的な出来事だった。思い返せば私が早稲田大学第一文学部のロシア語クラスに入学した1968年にワルシャワ条約軍がプラハに侵攻した。それから半世紀を過ぎての悪夢の再来である。私は葛藤を抱えながら結局ロシア・スラヴ民族学研究の道に進んだが、当時フィールド・ワークの殆ど不可能なスラヴ圏を研究する文化人類学者は皆無で、逆にそのことが幸いして、私は大阪の国立民族学博物館に最初の職を得ることができた。同じ理由で私に続いてスラヴ民族学を専攻する文化人類学者は未だに殆どいない。そのような事情もあり、侵攻後2年が過ぎたが、この出来事の民族学的視角からの論評は、今に至るまで現れていないように思われる。スラヴ民族学を専攻し、ウクライナを民族学の視角から考察してきた者として、その成果を社会に還元することは私の責務である、と考え、今回この原稿を書かせて頂くことにした。

そもそもプーチンはウクライナ侵攻の前の2021年7月に発表した論文「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」においてロシア人とウクライ

ナ人の歴史的一体性は語っているが、さすがに民族=エトノスとしてのロシア人とウクライナ人の一体性については何も語っていない。それでは民族としての「ウクライナ人」とは何なのか、その問題をロシア人とウクライナ人が異なる目線でどう考えてきたか、を歴史的に考察することが本稿の目的である。

本稿ではウクライナを対象としてきたウクライナ民族学を二つの視角から考える。第一に帝政時代から連続するロシア・ソビエト民族学の枠組みにおけるウクライナ民族学であり、第二にスラヴ民族学の枠組みにおけるウクライナ民族学である。この二つの枠組みは相互に重なり合いながら微妙な関係にある。そしてその重なり合いの中にあるのがロシア、ウクライナ、ベラルーシの三民族である。

1 帝政時代のロシア民族学におけるウクライナ——小ロシア

この問題を考える為にはそもそも「民族」とはなにか、という自明のように見える問題をもう一度ウクライナに即して考える必要がある⁽¹⁾。プーチンが「ウクライナとロシアの歴史的一体性」を語ったのは、一般的に「歴史の共有」が「民族」の存立要件として語られるからである。しかしプーチンが言う「ウクライナとロシアの歴史的一体性」とは中世のキエフ公国（キーウ・ルーシ）時代の「一体性」であり、ウクライナ人がイメージするウクライナの歴史的一体性は、キエフ公国崩壊以降のウクライナの歴史の共有である。ウクライナの歴史英雄叙事詩ドゥーマが歌いあげるのはコサックの対ポーランドあるいは対クリミア・タタールとの闘争であり、モンゴルの来襲についてはウクライナ・フォークロアは何も語っていない。これはウクライナ民族文化のアイデンティティが17世紀のヘトマン国家時代に形成されたことを示している。

「民族」の存立のために挙げられる要件の一つは、「一定の空間を固有の領域として持つ」ということだが、プーチン論文はウクライナが固有の領土を持つことを否定している。ロシアのウクライナ侵攻はロシアが現在のウクライナ—ロシア国境を越えてウクライナに侵攻したことに始まる。この現在のウクライナの国境は最終的に第二次世界大戦後に確定した。しかしプーチンは現在の

ウクライナの国境をソ連時代に人為的に引かれたものとみなし、それゆえソ連時代の国境を受け継いだ現在のロシアとウクライナの国境は国際法的な意味での国境ではないとみなしているようだ。それはウクライナ人の民族分布が必ずしも現在の国境には一致していないからである。ウクライナ共和国東部のドンバス地方にはもともと多くのロシア人が居住しており、今回のロシアの侵攻の遠因となっているが、逆にロシアのクバン地方には18世紀末に解体されたザポリージャ（ザポロージェ）・コサックから新たに編成された黒海コサックが移住しており、ウクライナ語の話者が多い。この地域に1811年に創立されたクバン・コサック合唱団は、現在もロシア民謡とウクライナ民謡の双方をレパートリーとしている。

つぎに「民族」の成立要件としてしばしば挙げられるのは、独立した共通の文化を持つことである。民間信仰、年中行事などの精神文化、民謡、民族舞踊などの音楽文化、家族、結婚などの社会文化、家屋、衣装、食事などの物質文化などにおいてウクライナは確かにロシアとは区別される特徴を持つが、逆に共通点も多い（〔森安1986〕参照）。微視的に見てウクライナの独自性に注目するか、大きく他の東スラヴ民族との共通性に注目するかで、ウクライナの民族学的相貌は違った見え方をする。ウクライナの民族学におけるウクライナ像は前者で、ロシアの民族学におけるそれは後者といえる。

つぎにしばしば「民族」の成立要件として挙げられるのが「独立した共通の言語」によって結びついていることである。しかしプーチンのウクライナ語観は帝政時代の、ロシア語を標準語とみなし、ウクライナ語をその下位概念、すなわちロシア語内の「小ロシア方言」とみなす蔑視的な言語観からおそらく変わっていない。現代のロシア人の多くもおそらくロシア語とウクライナ語を対等の言語とはみなしていない。

帝政ロシアにおいてウクライナは小ロシアと呼ばれ、ウクライナ語はロシア語の小ロシア方言とみなされていた。基本的にウクライナ農民の言語だったウクライナ語は既にコトリャレフスキーの『エネイダ』によって文学の言語として文語の道を歩み出していたが、この作品は「パロディ叙事詩」という低位のジャンルに属するものだった。しかしウクライナ語はウクライナ人の民族的

自覚に伴い、高尚な「われわれウクライナ人の言語」として意識されるようになっていった⁽²⁾。1840年にタラス・シェフチェンコが処女詩集『コプザーリ』を出し、本格的なウクライナ国民文学が展開されていった。ゴーゴリのようなウクライナ出身のロシア語作家はウクライナに対して主に「小ロシア」の呼称を使ったが、シェフチェンコはもっぱら「ウクライナ」の呼称を用いた。しかしロシアの文学批評はシェフチェンコを含むウクライナ語作家の試みには冷淡だった。当時の指導的文学批評家であるペリンスキーは、ウクライナ語による文学作品を集めて1841年に出版された文集『燕』に対して次のように反応している。

「この世に小ロシア語というものが存在するのだろうか？ それともそれは地方の方言なのか？ この問題に答えるとそこから第二の問いが生まれる。小ロシア文学は存在しうるか？ そして小ロシア出身の文学者は小ロシア語で書くべきなのだろうか？ 最初の問いには肯定も否定もできる。小ロシア語は実際小ロシアが独立していた時存在していたし、今でもこの栄光の時代を歌った民謡の記念碑の中に生きている。しかしそのことは小ロシア人が文学を持っていることを意味しない。民衆詩はまだ文学ではない」[Белинский 1954:176-279] ([伊東 2019:74] 参照)

ペリンスキーの認識ではウクライナ語は存在するが、それはヘトマン時代の過去の遺産であり、まだ文学ではない。しかしシェフチェンコのウクライナ語による文学活動が更に展開していくと（ただしシェフチェンコは散文はロシア語で書き、9篇の小説を残している）、ロシア政府はウクライナ語の文学語への昇格を民族独立運動に結びつくものとして危惧するようになる。1863年に当時の内務省ヴァルーエフは秘密指令を出し、検閲局に対して宗教的内容および一般教育を意図した本のウクライナ語による刊行を許可しないように指示した。これに反対した教育省ゴロヴニンに対して、ヴァルーエフは、この処置をとった理由を5つ挙げた。「①ウクライナのインテリゲンツィアがその政治的
目的追求においてウクライナ農民と結びつくのを防ぐためにこれがもっとも有効な方法であること、②まさに存在そのものが疑わしいような言語でウクライナ農民は教育されるべきではない。なぜならウクライナで「大衆によって使わ

れている方言」は、ポーランドの影響によって歪められたロシア語にほかならないからである（ヴァルーエフは別の箇所で「ウクライナ語は存在しなかったし、存在していないし、これからも存在しえない」としている）、③ウクライナ農民はウクライナ語よりもロシア語をよりよく理解するから、新しいことばを学ぶ必要はないこと、④別個独自のウクライナ語の追及は、本当のところはウクライナのロシアからの分離の要求であること、⑤宗教的と否とにかかわらずウクライナ語による印刷刊行は「ロシアの利益」に反する」[中井 2023:67-68]。

このような認識に基づき、1876年にエムス法が施行され、ウクライナ語の出版、上演が禁じられることになるのである。

ヴァルーエフの発言で注目すべきは、「ウクライナ語は歪められたロシア語である」という主張である。この主張は現在のロシア語が「タタールの頸木」時代に多くのチュルク系の語彙を借用し、想定される「純粋なロシア語」ではなく「歪められたロシア語」になっていることを考えればそもそもナンセンスであるが、この主張にはおそらく当時のロシア語話者のウクライナ語に対する実感が込められている。ソ連邦成立後、ウクライナ語はロシア語内の小ロシア方言という位置付けから、独立したウクライナ語に昇格したが、ソ連邦におけるロシア語のウクライナ語に対する優位は変わらず（ソ連時代にロシア語は民族間交流語であり、ウクライナ語は民族語であった）、「歪められたロシア語」としてのロシア人にとってのウクライナ語のイメージは19世紀から現代にも受け継がれているといえる。19世紀のプーシキン、ゴーゴリ、トゥルゲーネフといった作家たちが文学語としてのウクライナ語に関心を持った形跡はない。ロシアに生まれながらウクライナ語とロシア語で創作活動を行ったマルコ・ヴォフチョーク（1833-1907）は例外的存在である⁽³⁾。ウクライナ文化・言語に対する20年前のソルジェニーツインの次のような侮蔑的発言はヴァルーエフのそれを彷彿とさせる。

「ウクライナの文化を国際的な水準にまで引き上げるには、まだ数十年はかかるだろう。現在のところ、ウクライナの学者達が外国語に翻訳されることを期待する場合には、ロシア語で書いている。ウクライナ語がもっと広く知ら

れ、直截に翻訳が行われるようになるまでにはまだたっぷりの時間が必要だ」
[ソルジェニーツィン 2000:104-105]

「しかし、その後オーストリアでは、オーストリアのてこ入れで、歪められた、民族語でないウクライナ語がつくられ、そのなかには多くのドイツ語やポーランド語の単語が詰め込まれた」[ソルジェニーツィン 1990:24]

言語を民族的アイデンティティの最大の指標と考えるなら、ウクライナ語の文化的独立性を否定するソルジェニーツィンがロシアとウクライナの分離に反対したのは当然のことであろう。彼はソ連崩壊時に、東スラヴを3つの独立国家に分離することに反対していた（[阿部 2003] 参照）。

このようなロシアにとってのウクライナは、ロシア民族学におけるロシアと少数民族との関係とは大きく異なる。ロシアにとっての非ロシア系民族はロシア人にとっては完全な異民族であり、「他者」であるが、ロシアにとっての被支配民族であるウクライナは支配民族であるロシアともっとも近く、同じ東スラヴ民族にグルーピングされる民族だからである。ロシアにとっての非ロシア系民族はどれほど過去に抑圧と迫害の対象であったとしても、その存在を論理的に否定される対象ではない。

歴史的に見ていけば、帝政時代におけるロシア民族学の始まりは1845年のロシア地理学協会の成立である。これ以降ロシア人研究者がロシア語を記述言語としてロシア内の諸民族についての情報を（バフチンのタームを使えば）モノロギ的に記述する、という体制が出来上がった。しかし既に独立した言語としてウクライナ語が使われはじめていたウクライナではこのモノロギ的構図が脅かされる可能性が出てきた。1873年にロシア地理学協会の南西支部がキエフに設置され（北西支部はヴィルニユスに置かれた）、これがウクライナ民族学研究の拠点となり、ウクライナ人研究者がウクライナ語でウクライナ民俗誌を執筆する可能性が生まれた。しかしその3年後の1876年にエムス法によってウクライナ語の出版が禁じられ、地理学協会南西支部が閉鎖されると、ウクライナの民族学者がウクライナ語でウクライナを対象とした民族誌を執筆・刊行することは不可能になった [中井 2023:71]。ロシア帝国内のウクライナ民族学の研究は民族解放運動と結びつくとみなされ、チュビンスキーやド

ラホマノフの例のように実際に結びついたために⁽⁴⁾、この2人はエムス法によって国外追放が決まったのである。ウクライナ語によるウクライナ民族学研究の拠点は以後ロシアからロシア国外に移されることになった。このような状況下のロシアで出版されたものではあるが、パイピンの全4巻にわたる『ロシア民族学史』(1890-1892)は「ロシア民族学」の枠内で「大ロシア」「小ロシア」「白ロシア」「シベリア」の民族学研究を概観しており、1891年に出版された『小ロシア民族学』にその第3巻をあてていることが特筆される。ちなみにウクライナ語による最初のウクライナ民族学概説はフョードル(フヴェーディル)・ヴォウク(ヴォルコフ)によって書かれ、1928年にプラハで出版された。ヴォウクは19世紀後半から20世紀初頭にかけてウクライナ民族学、考古学、形質人類学の広い領域で業績を残したが、エムス法によってウクライナ語の出版が不可能になっていたので、主な研究はロシア国外でウクライナ語とフランス語で公開している。

2 オーストリア＝ハンガリー帝国支配時代のガリツィア・ウクライナスラヴ民族学の文脈の中のウクライナ

これに対して19世紀オーストリア時代のガリツィア、すなわち西ウクライナにおいてはウクライナは支配民族オーストリアによってその存在が否定される対象ではなく、帝政ロシア時代に禁じられたウクライナ語の出版も続けられていた。その中心は現在のリヴィウ、当時のレムベルグであった。ここではウクライナ文学のみならず、ウクライナ・フォークロア、ウクライナ民族学研究などの論稿も出版された。

リヴィウには1873年にシェフチェンコ記念学術協会が設立された。帝政ロシア内のウクライナの作家、研究者も、エムス法の施行後ウクライナ語文学、ウクライナ民族学に関する研究論文などをここオーストリア領リヴィウで発表するようになった。リヴィウがオーストリア領からポーランド領となった後もこの協会は1940年まで存続したが、ソビエト政権によって廃止され、カナダ、アメリカに亡命した。1989年にウクライナに帰還、現在に至っている

(〔Маланчук 1977〕 参照)。

ところでオーストリア=ハンガリー帝国は国内にウクライナのみならず、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、クロアチア、スロヴェニアなど最も多くのスラヴ系民族を抱える国であった⁽⁵⁾。これらの民族の間に既に18世紀末から始まっていたスラヴ文化の復興運動は19世紀半ばからオーストリアの支配から独立しようとする政治運動に発展した。スラヴ人の言語学的・文化的共通性をテーマとしたスロヴァキアのコラルの叙事詩『スラーヴァの娘』“Slávy dcera”やシャファーリクの『スラヴ古代文明』“Slovanské starožitnosti”はロシア語訳されてロシアの汎スラヴ主義やシェフチェンコ思想にも影響を与えた。

オーストリア領ガリツィア・ウクライナにおけるウクライナ人の民族意識も当然、オーストリア領内のスラヴ人のこのような動きに刺激を受けることになった。しかしオーストリア・スラヴ主義はカトリック系のスラヴ諸民族の独立をオーストリア国内で実現しようとするものだったので、ガリツィアのウクライナ人の目指すものとは方向が異なった。ロシアは正教圏のスラヴを統合する国家イデオロギーとして汎スラヴ主義を標榜し、ロシアと同じ東方正教を奉じるブルガリア、セルビアをオスマン帝国から解放することを目指した。しかしウクライナ、ベラルーシを自らの頸木から解放することは念頭になかった。

ここで19世紀におけるスラヴ圏全体の状況を概観してみる。18世紀末の三国分割の結果、国家としてのポーランドは消滅し、19世紀にはスラヴ世界はロシア帝国、オーストリア=ハンガリー帝国、オスマン帝国の三つの多民族国家によって分断されることになった。この三つの帝国のうちスラヴ民族が同じスラヴ民族を支配していたのはロシア帝国のみであった。ロシア帝国内にはロシア、ウクライナ、ベラルーシの東方正教を奉じる東スラヴ3民族とポーランド人が居住していた⁽⁶⁾。オーストリア=ハンガリー帝国にはカトリック系のスラヴ諸民族が⁽⁷⁾、オスマン帝国には、ブルガリア、セルビア、ツルナゴラなどの東方正教を奉じる南スラヴ諸民族が居住していた。

3 両大戦間におけるスラヴ民族学の興隆

20世紀になり、スラヴ人を支配していた三つの帝国が崩壊し、再編成された。ソ連ではロシアと共にウクライナとベラルーシがソ連の枠内の社会主義共和国として名目上独立し、西スラヴはポーランドとチェコスロヴァキアとして独立、南スラヴはユーゴスラビアとブルガリアとして独立した。この結果オーストリアを盟主としてその内部に居住するスラヴ民族の解放を目指そうとするオーストリア・汎スラヴ主義と、ロシアが盟主となって南スラヴ民族の解放を目指そうとするとロシアの汎スラヴ主義の対立はとりあえず解消し、改めて対等の立場でスラヴ人の文化的共通性を探ろうとする機運が高まった⁽⁸⁾。

両大戦間にスラヴ民族学はスラヴ方言学と連動して発展したが、旧オーストリア＝ハンガリー帝国の支配から解放されたスラヴ諸民族にスラヴ民族学の機運が高まった。スラヴ文化共通の独自性を明らかにすることによって、従来非支配民族として従属の立場にあったスラヴ人が自らの文化的共通性と独自性を明らかにしようとし始めたのである。物質文化や農耕儀礼などをも含めたスラヴ比較民俗学の研究がなされるようになった。クラクフで1929年にスラヴ方言学と民俗学の雑誌『スラヴ人』“Lud Słowiański”が刊行開始される。1927年にライプツィヒとベルリンでドミトリー・ゼレーニンの『ロシア（東スラヴ）民族学』がドイツ語で出版された。この著作が帝政ロシア時代の民族学とソ連民族学をいわば橋渡しをしている著作であることは、カッコつきでロシアと東ロシアを同義のものとみなしているその書名からも明らかである。彼は方言学者でもあり、この著書でロシア北部と南部が方言学的・民俗学的に顕著な差異を示すことを指摘し、北ロシア人と南ロシア人を異なる民族であり、東スラヴは4分割されると主張している。

1927年にクラクフで第二回国際スラヴ地理学・民族学会議が開催され、1929年にプラハで第一回国際スラヴィスト会議が開催された。この会議の民族学のセクションでスラヴ比較民俗学の研究も発表されるようになった。1929年から39年にかけてクラクフのカジミェシュ・モシンスキの大著『スラヴ人の民衆文化』が出版される。革命後にモスクワからチェコスロヴァキアに移っ

たピョートル・ボガトウイリヨフはチェコ、スロヴァキア、カルパチア・ウクライナをフィールドとしてスラヴ比較民族学の領域で両大戦間に業績を残した⁽⁹⁾。しかし今に至るまでスラヴ人全体を対象とした民族学のモノグラフは上記のモシンスキの著作のみであり⁽¹⁰⁾、ひとりの著者による単著として刊行された東スラヴ民族学のモノグラフは上記ゼレーニンの著作のみである⁽¹¹⁾。またブルガリアではヴァカレルスキが単著で『ブルガリア民族学』を書いているが、包括的な西スラヴ民族学や南スラヴ民族学の概論を単著で出版した民族学者はいない。

ちなみにこの時期のウクライナ民族学史で特筆すべきは、ウクライナ語による最初のウクライナ・フォークロアの概説書であるフィラレート・コレッサの『ウクライナ口承文学』がポーランド領時代のリヴィウで1938年に出版されたことである。

4 第二次世界大戦後のソ連主導のスラヴ民族学

第二次世界大戦後全てのスラヴ圏は社会主義化され、19世紀の「ロシアが全スラヴ民族を解放する」という理念が社会主義によって実現されることになり、東欧全体の文化的一体性を強調するためにスラヴ学はソ連主導の汎スラヴ主義的性格を帯びるようになった。ワルシャワ条約軍がプラハに侵攻した1968年にブラチスラヴァで国際スラヴ民族学雑誌『エトノロギア・スラヴィカ』が創刊された。しかしその後国際雑誌としては1989年に終刊し、その後『エトノロギア・スロヴァカ・エト・スラヴィカ』と誌名を変えた。ここで戦後のソ連主導のスラヴ民族学研究で生じた大きな変化に触れておかなければならない。社会主義が国是となったスラヴ諸国では宗教民族学の研究が事実上禁止されたのである。

一方1966年から1989年までユリアン・ブロムレイが所長を務めていたモスクワの民族学研究所は戦後積極的にロシア国外のスラヴ諸国の民族学的研究を行った。その先鞭をつけたのはこの研究所から1950年代に出始めた「世界の諸民族」という総タイトルの民族学概説シリーズである。ここで1964年に出

版された『ソ連邦内ヨーロッパの諸民族』で戦後初めてウクライナの民族学概説がなされ、1964年から65年にかけて出版された『ソ連国外ヨーロッパの諸民族』にはソ連国外のスラヴ諸民族の民族学概説が含まれていた。ブロムレイの主導するかたちで1970年代半ばから「スラヴ民族学」という総タイトルで東スラヴ、西スラヴ、南スラヴの民族学概論を3巻にまとめる計画がユネスコの支援も受けて立ちあがったが、実現したのはK.チストフ編集の共同執筆による『東スラヴ人の民族学』のみで、1987年にモスクワの科学アカデミー・民族学研究所からロシア語で出版された。ここではベラルーシとウクライナの民俗誌のあらましも主にロシア人研究者によってロシア語で執筆されている。この出版に先立ってスラヴ各国では個別にそれぞれの民俗誌が出版された。1976年から81年にかけてポーランドでは2巻本の『ポーランド民族学——民衆文化の変貌』がヴロツワフで、1980年に『スロヴェニアの民衆的伝統——スロヴェニア人民俗誌概説』がリュブリャナで、『ベラルーシ人の民族学——歴史、民族起源、民族史』がミンスクで1985年に出版された。

ブルガリアでは1981年に『ブルガリア民衆文化——歴史民族的学概』がソフィアで出版され、そのロシア語訳が1984年に出版された『ブルガリア人——伝統的民衆文化概説』である。これは「スラヴ人の民俗誌」刊行プロジェクトの一環として刊行されたものである。ブルガリアとマケドニアを含む旧ユーゴスラヴィアをひっくるめて「南スラヴ」にまとめて民族誌を書く、ということにはもともと無理があったのである⁽¹²⁾。これとは別にブルガリアでは全3巻の『ブルガリア民族学』(1980-1985)が刊行されたが、これに対抗するようにマケドニアで準備された『マケドニア人の民族学』の刊行はユーゴスラヴィア崩壊後の1996年であった。しかしソ連時代の社会主義スラヴ圏は「スラヴ人」という概念で一括され、民族学研究において非スラヴ的要素は研究されにくくなった。1973年から78年にかけて双書『海外ヨーロッパ諸国における民間暦』のモスクワの民族学研究所からの出版が始まったが、ブルガリアの記述のみブルガリアのタチヤナ・コレヴァが担当し、残りのスラヴ人の民間暦の記述はモスクワの民族学研究所のスタッフが行っている。コレヴァの死後はブルガリアの民間暦の記述はモスクワ民族学研究所のマコヴァが担当した。

もともとソ連に忠実だったブルガリア民族学では民族形成に重要な役割を果たしたブルガリア文化におけるプロト＝ブルガール人の文化研究や先史時代のトラキア文化との関連の研究も避けられた。ちなみにバルカン地方に居住する南スラヴ人の文化は他の非スラヴ系のバルカン諸民族（ルーマニア、アルバニア、ギリシャ）とも顕著な民俗学的共通性を示し、更にバルカン諸民族の文化の全体はカフカズ地方の文化と顕著な共通性を示しているが、このようなバルカン民俗学や、バルカン＝カフカズの関係を扱う比較民族学的研究もソ連時代は停滞した。

5 ソ連崩壊後のウクライナ民族学——スラヴ民族学の脱中心化の中で

1991年にソ連が崩壊すると、スラヴ世界に対するソ連の一元的支配が終わりを告げ、スラヴ民族学の脱中心化がはじまった。象徴的なのはスロヴァキアで2000年に出版された『スロヴァキア——民衆文化のヨーロッパ的コンテクスト』である。ここにはスロヴァキア民族学のスラヴ民族学の枠からの解放が見てとれる⁽¹³⁾。

「東スラヴ」という枠組みから政治的・行政的に解放されたウクライナでもウクライナ語によるウクライナ民族学の概論がウクライナ語で相次いで出版されるようになった。私の手元には1994年にリヴィウで出版された共同執筆による『ウクライナの民族学』、同年にキーウで出版されたアナトーリー・ポノマリョフの『ウクライナ民族学』、1995年にキーウで出版されたハリーナ・ロズコクの『ウクライナ民族学』の3冊があるが、いずれもロシアとウクライナとの民族学的関連については全く触れていない。ちなみにベラルーシでは1989年におそらくベラルーシ語によるベラルーシ民衆文化の初めての記述が『ベラルーシ民族学百科事典』でなされた。

ウクライナをスラヴ民族ではない、と規定することは不可能だが、東スラヴ民族学の視点がウクライナとロシアの共通性のみ注目するのに対して、上記のウクライナ人研究者によるウクライナ民族学の記述がむしろウクライナの民

族学的独自性と一体性、ロシアとの違いを強調するのは当然のことであろう。これは1920年代の殆ど同時期に書かれたロシア人研究者ドミトリー・ゼレーニンの『ロシア（東スラヴ）民族学』（1927）とウクライナ人研究者フェーデル・ヴォウクの『ウクライナ民族学・[形質]人類学論考』（1928）の対立が100年後まで持ち越されていることを示している。ウクライナがスラヴといういわばスーパー・エトノスの下位のエトノス概念である東スラヴ、その更に下位に位置するエトノスである、という特殊な三層構造の中に組み込まれていることが問題を複雑にしている。

現在のウクライナ民族学は当然ロシアとの差を強調し、その自らの民族的一体性を強調する。それ故にカルパチア・ウクライナに居住しているエスニック・グループであるボイキ、レムキ、フツルィはウクライナ民族の下位カテゴリーとしては認められてきた。しかしソ連崩壊後に浮上してきたのが東スロヴァキアからウクライナのザカルパッチャ州にかけて居住するカルパチア・ウクライナ人が自らの言語として主張するルシン語の存在である〔三谷 2011: 87-94〕〔伊東 2005〕。ルシン語の話者は自らをルシン人と自称し、ウクライナ人とは異なる「第四の東スラヴ民族」であると主張している。ウクライナがソ連時代からソ連崩壊後の現在までこの言語をウクライナ語の方言とみなし、独立言語とはみなしていないのに対し、ソ連崩壊後のウクライナ周辺諸国はルシン語を独立言語として認定している。ここには帝政ロシア時代のロシア語とウクライナ語の関係が入れ子のように反復されているのである。

註

- (1) ヘンリー・スチュアートの『民族幻想論』は「民族」という概念が如何に曖昧であり、可変的であり、やっかいなものかを教えてくれる。
- (2) 同じ状況がユダヤ人定住区のウクライナに居住していたユダヤ人についても言える。ユダヤ人の公的な宗教語はヘブライ語だが、アシュケナージと呼ばれるポーランド、ベラルーシ、ウクライナのユダヤ人は日常生活においてはドイツ語の方言であるイディッシュ語を口語として用いていた。19世紀後半から20世紀初頭にはシャレム＝

アレヘムに代表されるイディッシュ語作家が輩出して、イディッシュ語は文語に昇格していき、ウクライナ・ユダヤ人の文語となっていった。イディッシュ語演劇も盛んに上演されるようになったが、1882年に帝政ロシアはイディッシュ語演劇の上演を禁じた。

- (3) これと対照的なのがポーランドのロマン主義時代に現れた T・バドゥラ (1801-71) などの「ウクライナ派」詩人たちである。彼らはテーマをウクライナに求めただけでなく、ウクライナ語で詩作した。その作品はアンソロジー「Українською мовою натхненні (Польські поети, які писали українською мовою)」(Київ, 1971) にまとめられている。
- (4) パウロ・チュビンスキー (1839-1884) はキーウ生まれの民族学者。1972年から78年にかけてベテルブルクで出版された『西北ロシアへの民族学調査旅行』全7巻はウクライナ民族学に関する基本文献である。同書の1-2巻には多くのウクライナ民話が収録されており、『世界の民話 27 ウクライナ』には独訳からの重訳だが、同書から9篇の民話が収録されている。また同時に彼は愛国的ウクライナ語詩人でもあり、現在ウクライナ国歌として歌われている『ウクライナ未だ死なず』の作詩者でもある。この詩は1864年に書かれた。あまりに愛国的なその詩により、民族学者としてのチュビンスキーの業績はソ連時代には殆ど無視された。ウクライナ民族学の領域での彼の業績は、ウクライナ独立後の1995年に論集『諸世紀の知恵』にまとめられた。

ミハイロ・ドラホマノフ (1841-95) はポルタワ県ハーチャチ生れの政治活動家・民族学者。1876年に『ウクライナの民話と伝説』をキーウで出版している。1889年に亡命した後ブルガリアで出版した『スラヴ人の宗教倫理的伝説——二元論的世界創造についての覚書』は私が以前に執筆した論文「ユーラシアの創生神話をめぐって」の骨子ともなった重要文献である。

- (5) ドヴォジャークの『スラヴ舞曲』(1878, 86) はオーストリアに居住するスラヴ諸民族の舞曲を集めたものである。そこにはウクライナの舞曲として「ドゥームキイ」も含まれている。
- (6) 19世紀にロシア帝国内で政治運動に関わりシベリア、極東に流刑になったロシア帝国内のポーランド人の中には流刑地の先住民族の民族学的・言語学的研究に携わることになったものが少なくない。サハ(ヤクート)の民族学的研究を残したシェロシェフスキ、サハ語の言語学的研究を行ったピェカルススキ、樺太アイヌの研究で知られるピウスツキが想起される。ちなみにこれと対照的な運命を辿ったのが19世紀にオーストリア領だったクラクフに生まれ、西欧で学びトロブリアンド諸島でフィールド・ワークを行い、イギリスの機能人類学者として大成したマリノフスキ(マリノフスキー)である。

- (7) ロシア領内の小ロシアではロシア正教が信仰されていたが、オーストリア領のガリツィア・ウクライナではポーランド支配時代の1596年にカトリックと正教の合同により成立したギリシア・カトリックが優勢であった。
- (8) 独立を遂げたスラヴ諸民族の「スラヴ人」としての民族意識が20世紀初頭に高まったことを芸術分野で示すのが1928年に描かれたアルフォンス・ムハ（ミュシャ）の連作歴史画『スラヴ叙事詩』である。
- (9) カルパチア・ウクライナは19世紀にはハンガリー領で、当時のロシア語では「ウゴールスカヤ・ルーシ」と呼ばれ、オーストリア＝ハンガリー帝国崩壊後の両大戦間にはチェコスロヴァキア領となりチェコ語でPodkarpatská Rus「カルパチア山麓ルーシ」と呼ばれた。ピョートル・ボガトウイリヨフはこの時代にチェコスロヴァキアに滞在しており、当時チェコスロヴァキア領だったこの地域でフィールド・ワークをおこなった。その成果がフランス語で出版された『カルパチア山麓ルーシにおける呪術・儀礼・俗信』（1929）である。その後この地域は第二次世界大戦後にソ連に組み入れられ、ウクライナのザカルパッチャ州となり、現在に至っている。ちなみにボガトウイリヨフのこの著作の邦訳書名が『ロシア・カルパチア地方のフォークロア』となっているのは明らかに誤りで、『カルパチア・ウクライナのフォークロア』とすべきものである（〔伊東 2004〕参照）。
- (10) 物質文化、社会文化、精神文化の三分野に渡ってスラヴ民衆文化全体を概観したエーヴェル・ガスパリーニの特異な大著『スラヴ母権制』もあるが、ガスパリーニは文献学者であり、本書もフィールド・ワークに基づいたものではない。
- (11) ゼレーニンの『ロシア（東スラヴ）民族学』は1991年にロシア語訳され、その際に原書にあった「ロシアの」という形容は削除されている。なおゼレーニンはシベリア民族学にも貢献しており、1936年に出版されたその方面の主著『シベリアにおけるオンゴン崇拜』は1952年に仏訳が出版され、レヴィ＝ストロースの『野生の思考』（1962）の第一章にも引用されている。
- (12) マケドニアは国家として第二次世界大戦後にユーゴスラヴィアの構成国として成立したが、ブルガリアは民族としてのマケドニア、言語としてのマケドニア語を認めなかった。マケドニア人のまとまった民俗誌はソ連で1964年に出版された『世界の諸民族 ソ連国外のヨーロッパの諸民族』第1巻で初めて記述された。
- (13) 2018年にベオグラードで開かれた第16回国際スラヴィスト会議において次回2023年第17回大会の開催国が決定されたが、スラヴ諸国の脱スラヴ化を象徴するかのようにならぬようにその際スラヴ各国からは立候補がなく、次回の開催地は国際スラヴィスト会議史上初めて、スラヴ圏外の都市パリに決定された（第17回大会の開催は実際にはコロナ禍と

ロシアのウクライナ侵攻という事態を受けて 2025 年に延期された)。

文献

- 阿部三樹夫「ウクライナ・ロシア関係論—ソルジェニーツィンのウクライナ論—」『久留米大学法学』47号、2003年。
- Baš, A. (úřed.) Slovensko ljudsko izročilo. Pregled etnologije Slovencev. Ljubljana. 1980.
- Белинский, В. Полное собрание сочинений. Т.5. Москва. 1954.
- Biernacka, M. i inne. (red.) Etnografia Polski. Przemiany kultury ludowej. T. I-II. Wrocław. 1981.
- Bogatyrev, P. Actes magiques, rites et croyances en Russie subcarpathique. Paris. 1929.
- ボガトウイリヨフ、ピョートル（千野栄一、松田州二訳）『呪術・儀礼・俗信——ロシア・カルパチア地方のフォークロア』岩波書店、1988年。
- Чистов, К. (ред.) Этнография восточных славян. Москва. 1987.
- Чубинский, П. Труды этнографическо-статистической экспедиции в Западно-Русский край. Т. 1-7. Санкт-Петербург. 1872-78.
- Мудрість віків. 1-2. Київ. 1995.
- Драгоманов, М. Исторические песни Малорусского народа. Кинв. Т.1-2. 1874-75.
- Молорусские народные предания и рассказы. Киев. 1876.
- Dragomanov, M. Note on the Slavic Religio-Ethical Legends: The Dualistic Creation of the World. Bloomington. 1961.
- Этнаграфія беларусаў: Гісторыяграфія, этнагенез, этнічная гісторыя. Мінск. 1985.
- Gasparini, E. Il matriarcato slavo. Firenze. 1973.
- 伊東一郎「ユーラシアの創生神話をめぐって——スラヴ=バルト・ウラル=アルタイ系諸民族における神話学的平行性の起源について」北方言語・文化研究会編『民族接触 北の視点から』六興出版、1989年。
- [文献解説]『呪術・儀礼・俗信——ロシア・カルパチア地方のフォークロア』『文化人類学文献事典』弘文堂、2004年。
- 「ルシン／スロヴァキア・ウクライナ人」原聖・庄司博史編『世界の先住民族ファースト・ピープルズの現在 6 ヨーロッパ』明石書店、2005年。
- 「ウクライナ文学史におけるゴーゴリ」伊東一郎『ガリツィアの森——ロシア・東欧比較文化論集』水声社、2019年。

- 「ウクライナの歴史と文化」『季刊 民族学』182号、2022年。
- (編)『スラヴ民族の歴史』山川出版社、2023年。
- Хаджиниколов, В. (отв.ред.) Болгары. Очерк традиционной народной культуры. София.1984.
- Колесса, Ф. Українська усна словесність. Львів. 1938.
- Levi-Strauss, Cl., *La pensée sauvage*. Paris.1962.
- レヴィ=ストロース、クロード (大橋保夫訳)『野生の思考』みすず書房、1976年。
- Лозко, Г. Українське народознавство. Київ. 1995.
- Макарчук, С. (ред.) Етнографія України. Львів. 1994.
- Маланчук, В. Розвиток етнографічної думки в Галичині кінця XIX- початку XX ст. Київ. 1977.
- 三谷恵子『スラヴ語入門』三省堂、2011年。
- 森安達也 (編)『スラヴ民族と東欧ロシア』(「民族の世界史」10) 山川出版社、1986年。
- Moszynski, K. *Kultura ludowa Słowian*. Kraków.1929-39.
- 中井和夫『ウクライナ・ベラルーシ史』山川出版社、2023年。
- Народы европейской части СССР. Т. 1. Москва. 1964.
- Народы зарубежной Европы. Т. 1. Москва. 1964.
- 小沢俊夫編『世界の民話 27 ウクライナ』ぎょうせい、1985年。
- Пономарьов, А. Українська етнографія. Курс лекцій. Київ.1994.
- Пыпин, А. Этнография малороссийская. (История русской этнография, Т. III.) Санкт-Петербург. 1891.
- Солженицын, А. Как нам обустроить Россию?//Литературная газета. 1990, No. 38.
- ソルジェニーツィン、А. (木村浩訳)『甦れ、わがロシアよ——私なりの改革への提言』日本放送出版協会、1990年。
- Солженицын, А. Россия в обвале. Москва. 2006.
- ソルジェニーツィン、А. (井桁貞義、上野理恵、坂庭淳史訳)『廢墟のなかのロシア』草思社、2000年。
- スチュアート、ヘンリー『民族幻想論——あいまいな民族 つくられた人種』解放出版社、2000年。
- Stoličná, R. (editorka) Slovensko. Európske kontexty ľudovej kultúry. Bratislava. 2000.
- Токарев, С. Календарные обычаи и обряды в странах зарубежной Европы. М., 1973-1983.
- Томовски, Кр. (уред.) Етнологија на Македонците. Скопје. 1996.
- Вакарелски, Хр. Етнография на България. София. 1974.
- Вовк, Хв. Студії з української етнографії та антропології. Прага. 1928 (Київ. 1995).
- Zelenin, D. Russische (ostslavische) Volkskunde. Leipzig und Berlin. 1927.

Зеленин, Д. Восточнославянская этнография. Москва. 1991.

——— Культ онгонов в Сибири. Москва. 1936.

Zelenine, D. Le culte des idoles en Sibérie. Paris. 1952.

付記

本稿は2023年度現代文化人類学会第2回定例研究会「ウクライナ侵攻問題と人類学・民族学から／への問い」における発表原稿「ロシア・ソビエト民族学におけるウクライナとスラヴ民族学におけるウクライナ」に大幅に加筆・訂正を施したものである。また本稿は今号に筆者が執筆した『講義 ウクライナの歴史』の書評に対する補遺の意味も持っている。